ケーススタディ

大阪市立自然史博物館

所在地　大阪府大阪市東住吉区長居公園1-23
設置者　民間非営利法人(地方独立行政法人)

指定施設／美術博物館

DATA

「M3(Motto Minnano Museum)プロジェクト」

2022年度実施　|　人材育成・連携

博物館がすべての人々が学び楽しむ場となれるよう、「もっとみんなのミュージアム」を目指し、2022年10月～2023年3月の間、プログラムや利用環境整備の工夫の試行や、博物館職員向けの研修会などを行った。近隣の美術館や博物館、障がい者スポーツセンター等と連携して実施することで、知識や改善点を共有し、意識改革と相互協力のネットワークの輪を広げていくことも意図した。

取材日	2023年12月6日
回答者	佐久間大輔(大阪市立自然史博物館　学芸課長) 石井陽子(大阪市立自然史博物館　主任学芸員)

「M3(Motto Minnano Museum)プロジェクト」

この事業に取り組むことになったきっかけを教えてください。

背景として、令和2～3年度に当館の運営母体である大阪市博物館機構が申請していた文化庁の「地域と共働した博物館創造活動支援事業」で、視覚障害がどのようなものであるかの理解や障害当事者への対応についての研修などを行っていました。そのなかで、デジタル機器のコミュニケーションツールなどを活用したユニバーサル化の試行なども行っていたのですが、その後、大阪市博物館機構の方向性が、フィルムのデジタル化など、デジタルアーカイブの方にフォーカスされていき、ユニバーサル化の部分がメニューから外れていきそうになっていました。そこで、それではその部分を切り出して、広げていこうかということになりました。

平行して、令和2年度には笹川科学研究助成をいただいて、視覚障害者と一緒に展示解説パネルの内容の見直しをする取組も行っていました。そもそものきっかけは、展示内容や利用についての質問・相談を受け付ける「質問カウンター」に窓口当番として学芸員が座っていたときに、「今度視覚障害のある子どもたちと博物館に来るのだが、その子たちも楽しめるものはないか」と声をかけられたことでした。当館には1986年から触察できる実物標本や模型等の展示があるのですが、視覚に障害のある人たちにとって、解説パネルの内容が本当にこれでいいのか、といった問題意識も出てきました。その他にも、そうした方々をバックヤードツアーでご案内したり、展示パネルの見直しを一緒にする中で、博物館でできることはもっとあるのではないかと、いろいろと意見を聞きながら少しずつ考えていた状況がありました。

長居障がい者スポーツセンターで行った「てこぽこさんとはくぶつかん」によるワークショップの様子

一方で、発達障害の方についても、館を拠点に活動している骨格標本を作るサークルから派生したグループが、2020年頃から既に支援活動を開始していました。骨格標本作成に参加した子どもたちのなかに、指示が上手く伝わらない子たちがいて、どう接したらいいのか、と考えはじめたメンバーがいました。どういう特性がある人たちなのか、どうしたら指示が伝わり、その子たちも安全に標本作りができるか、といったところをみんなで考えるうちに、発達障害のある子どもたちと博物館をつなぐことを目的としたグループになっていきました。今回も長居障がい者スポーツセンターでワークショップを行う際に、彼らのノウハウを活かして、各種の障害のある人に配慮した作業過程や、材料の配置などを工夫していました。

このグループの成り立ちもそうですが、誰もが利用できる公立博物館として、展示や普及教育、資料収集、研究などの活動をしていると、学芸員が常駐する窓口があったり、博物館の友の会など様々なグループが館の周辺で活動しているため、障害のある方や、障害者支援の活動をしている方などを含め、多様な方々と館の間につながりができます。来館者の中には、学芸員への質問が止まらなくなったり、展示室で大きな声を出したり、手をたたいて大きな音を出してしまう人もいます。そういう人たちにどう博物館が対応できるのかと、本当に目の前の課題として考えるタイミングだったのだと思います。

そのようにして、視覚障害のある子どもたちを支えるNPOの方とつながり

表1）「M3（Motto Minnano Museum）プロジェクト」の4本柱

1	視覚障害者に博物館を豊かに楽しんでもらうためのプログラム開発と試行	・3D プリンター活用のための研修 ・触察ワークショッププログラム開発等
2	視覚障害者に常設展示を楽しんでもらうための改良・工夫	・点字・墨字パンフレットの作成 ・触察案内図の試作 ・視覚障害者接遇向上のための研修等
3	発達障害のある利用者のためのプログラム開発と研修実施	・ワークショップの実施 ・やさしい日本語とソーシャルストーリーガイド作成のワークショップと試作 ・ソーシャルナラティブとセンサリーマップについての講演会等
4	様々な人がともに博物館を楽しむためのイベント・講演会	・大阪自然史フェスティバルへの障害者支援団体の出展 ・インクルーシブな博物館についての講演会等

特に視覚障害、発達障害にフォーカスし、文化庁、令和4年度博物館機能強化推進事業（Innovate MUSEUM 事業）の助成を受けて実施した。

ができたり、博物館周辺で発達障害の子どもたちと博物館をつなぐ活動をするグループが出てきました。こうした周辺状況が揃ったこともあって、事業化して助成を申請してみようということになりました。（※表1）

どのようなプロセスで連携をしましたか。

今回、文化庁のInnovate MUSEUM事業に申請するにあたり、我々地方独立行政法人大阪市博物館機構と、大阪市立東洋陶磁美術館、大東市立歴史民俗資料館、高槻市立自然博物館、大阪市長居障がい者スポーツセンターの5者が「M3プロジェクト実行委員会」として連携をしましたが、これまでつながりがなかったのは長居障がい者スポーツセンターだけでした。同センターは当館と同じ長居公園内にあり、スポーツセンターの利用者が当館を利用しに来ることはありましたが、それ以上の交流はほとんどありませんでした。

その他の館とは、以前から西日本自然史系博物館ネットワーク などでのつながりがあったため、改めてチームビルディングする必要がないほどの連携の素地がありました。さらに、今回の博物館関係者向けの講演会や研修などでは、この5者に限らず広く参加を募り、且つ内容を動画収録してオンライン公開しました。このように間口を広く開いたのは、学会や研究会等で知った先進的な活動をしている方を講師としてお招きして、みんなで教えていただいた方が話が早いと考えたからです。普段から、互いに「おすそ分け」をするご近所付き合い的な関係がありますので、自分たちが得た知見を他館にも共有する形になったのは自然な流れでした。

また、助成の申請にあたって、館の中で意思決定が完結できたことは大きかったと思います。我々は地方独立行政法人として決定権が館長や理事

1 自然史系博物館関係者および市民による活動を支援することを目的とした会員制のネットワーク。共同での研究活動、学芸員の経験交流、博物館関係者向けのセミナーやシンポジウムなどを行っている。

カラフルアート・ワークショップ「さわってみよう東洋陶磁」の様子
（美術品レプリカ制作と触察ワークショッププログラム開発）

長レベルにあります。このため大阪市役所の本庁に行かなくても、所管の違う館とも自分たちで交渉して決定して、事業を申請することができました。その意味では、機敏に動くことができたと思います。

実施にあたり、相談した相手や、知見やヒントをどのようにして得たのか教えてください。

博物館関係者向けの研修を組み立てるにあたっては、日本博物館協会などの博物館・美術館業界のネットワークや、先行して実践している館の職員さんとの情報交換、これまでに参加した研究会などで見聞きした専門家などから知見を得ていました。今回の講師も、自分たちがそれぞれ所属している学会や研究会で知り合ったり、そこで先進的な実践を紹介した方など、何ら

かのつながりがあった方たちでした。

当事者向けのプログラム開発にあたっては、視覚障害のある子どもたちを支えるNPO、発達障害の子どもたちと博物館をつなぐ活動をしている団体のみなさんに、たくさんの協力をしていただきました。

また、以前当館の外来研究員だった方に、他館で障害のある方の展示見学支援に取り組んだ経験があることに加え、海外の事例にも詳しい専門家がおられたため、その方の意見を聞いたり、相談にのってもらったりしながら進めました。

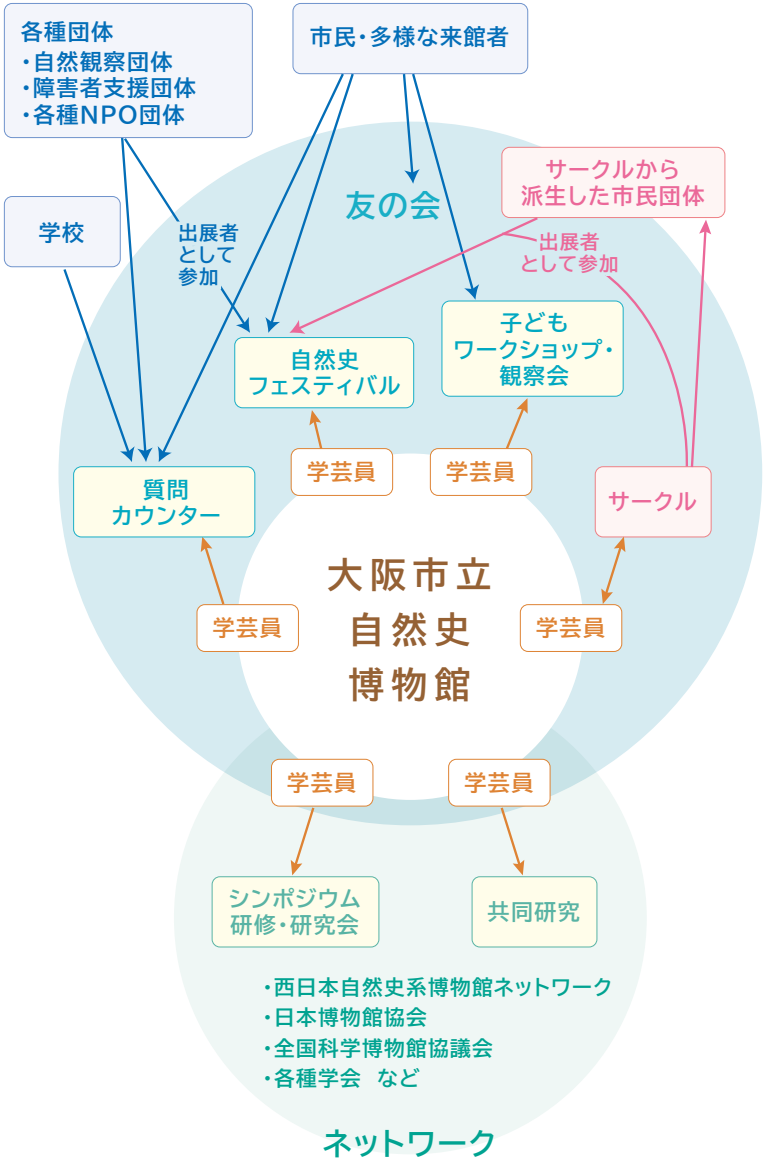
この事業を行ううえで、特に重要だったと思うこと、他館にもおすすめしたいと思うことは何ですか？

館の外の人間と一緒に何かをすることに、慣れておくことが大事だと思います。館の中だけで完結させようとするのはもうやめて、必要なら「一緒にやろうよ」と言って助けてもらう、という癖を付けておかないといけないと思います。

当館は、共同研究のような形で外の人が入ってくることもごく普通にありますし、「大阪自然史フェスティバル」のように様々な団体が出展したりして、みんなでお祭りをつくるような場もあります。そのように、大学の人であろうと、研究所の人であろうと一般の人であろうと、そうした外の人たちと一緒に事業に取り組むことは、何も特別ではないという館の風土があります。まずは、そういう姿勢が必要だと思います。

正直に言えば、当館も単独でできることは少ないのです。幸い、館の周りに上記のような人・団体がいてくださって、彼らに助けてもらうことで、この事業も成り立ったと思っています。その意味では、館の周りにある、そうした「財」に気付くアンテナを張っておくことも大事だと思います。日々の窓口での市民からの質問対応業務も含めて、普段の業務の中でそうした姿勢でいることが一番手っ取り早く、様々な事業の素地をつくることにつながると思っています。

博物館の周りにある財



（作図は取材者）